

## 眞情

泉鏡花作

明治三十九年八月

何も自分で發明した言葉ではないが、「至誠は人を動す」で、凡そ文章に尊しとするところは誠心、誠意、自己の眞情を吐露することである。殊に手紙の文にあつては、たとへ言葉は整はずとも、文章は拙劣であらうとも、實用を主とするものであるから、其人の眞情さへ籠つて居たならば差支へないと信ずる。昔から、「手書きあれど文書き無し」などいふ諺もある通りで、成程、文章は巧みに書いても、眞に手紙らしい手紙を書くことは困難である。とは言つても畢竟眞心を籠めずに書くから困難になるのであつて、専門家が美文を綴るのではなし、眞情をさへ吐露させたらば、字句を整へることなど顧るに違があるまいと思ふ。

自分は年來「新小説」の書簡文を受持つて居るが、この選をする上にも主として以上の旨に則つて居るつもりである。ところが懸賞の故であるか、慣れた

故か、近頃は美文風の投稿が非常に増して来た。自分の考へによれば之は斷じて手紙の文として上策のものではない。例へば「花見に招く文」といふのを作る時に、其人は真心より花見に来て貰ひたいといふ念はないので、巧みに文章を飾つて美しく作り上げたとしたならば、あまり感服も出来ぬではないか。之に反して、庭の櫻が咲いた、君と快く一杯を酌み度いから来て呉れと、真心から書いたならば、辭句は整はずとも動かされる。

言文一致の手紙にあつては、以上述べたことは殊に適切に當てはまると思ふ。真心からさへすれば、文句を飾るといふ先きに、自然に好文句が出て来るのである。極めて好い手本は、例へば國を離れて、東京に笈を負つて来た者が、夜更けて何處やらの汽笛の聲を聞きながら、頻に懷郷の念に驅られてゐる所へ、郵便！と親からの一封の手紙。早速披いて讀む。書き手は田舎の天保老爺なり、本字も碌に知らぬけれど、息子を懷ふ心を先きに、それこそ折釘、金釘流、「せがれや無事か、さぞ寒からう、なまけてはいかぬぞ。」云々とあつたならば如何だらう。

息子にとつては、親しく親の温容に接するやつな氣がして、身に沁むばかりに覺えるだらう。ところが國から手紙は來たが見覺えある村くに一番の大先生の代筆で、さら／＼と達筆の書き流し「一筆啓上仕り候」式では、いかに文章が整つて居ても、嬉しとも懐しとも思はれず、よし思はれたりとも、極めて薄く、海山を距てゝの感じに過ぎない道理。されば心の籠らぬ手紙は、順序形式抜け目がなく、首尾一貫してあらうとも、丁度使ひの者が主人の口上を承つて、先方へ馳せ參じ、機械的にスラくと述べると同様、所謂口上を以て申上げます底の手紙になつて了ふ。しかしもしそれが誠でなく虚言にしる、手練てくだにしる、典雅艷麗、婀娜、窈窕たるものに至つては迷つても差支へない。さなきだに人心亂る、節は竹の葉の露ばかりだにうけじとは思つても、稀世な美人ならだまされて通るがい、。

又こゝに注意を要するのは、禮儀作法の一條である。如何に字句は整はず、文章ほ拙くて好いと言つても、相當の禮儀といふものは缺いてはならぬ。よし距てのない仲、即ち親子、夫婦、兄弟、況してや

ともだちの間にあつても、儀式と言へば角が立つが、禮儀作法は存じて居らねばならぬ。眞情さへ吐露すれば野鄙でも差支へないといふもの、其野鄙なる社會、例へば土方は土方、車夫は車夫の仲にすら、其社會獨得の禮儀は見受けられるので、總じて禮儀が失くなれば無作法となる。其無作法といふものは、誠に御座敷へは出されぬものだ。だから言文一致の手紙の文中にも、なるべく言葉露骨に、萬事飾らぬが上分別と云うて、「オイ、コラ！」流の無作法な言葉を挾んだとしたらば、それは一種の朴訥といふことを殊更に衒つたので、甚だ見苦しい。

で、自分は今、手紙の文體は全然言文一致でなく、てはいかぬとは言はぬ。又元々通り是非候文であり度いとも言はぬ。候文で然るべきところは候文、有ります、ござります、で然るべき折は矢張り、有ります、ござります、何れでも勝手だ。又、侯、御座候式と、有ります、ござります、ませう、でせう式とが一文中に混じて居ても構はぬ。友達同士が訪問しても、初めは、左様、然らばの鹿爪らしい挨拶だから、手紙で言へば其處は候文、其うちに茶が出る、

酒さけがで出るで、世間話せけんばなしに砕くだけて行くところは言文一致げんぶんいつち。  
惚とぼ氣けるところは内證ないしやう、と先まづ斯かう言いった鹽梅あんばいである。

日記にっきについては、差さ當あたり發表はつぱうするほどの意見いけんはな  
いのですから。